4151・5141 進行

【コード進行の型 C004】橋を架けるドミナントセブンス

目的

唱歌の『 ふるさと 』と同じコード進行を機能分析して、Ｅフォームのスリー・コードを覚えると同時に、和音の一部を代理コードに置き換える方法やリハーモナイズの定番技法「橋を架けるドミナントセブンス」の響きを覚えます。

POINT

- **Ｅフォームのスリー・コード**
- **橋を架けるドミナントセブンスとアーメン終止**

ここでは唱歌の『 ふるさと 』(1914)と同じコード進行をＥフォームで機能分析していきます。この曲はスリー・コードで弾ける楽曲ですが、和音の一部を別のコードに置き換えることで､音色が鮮やかに変化する箇所があります。リハーモナイズの定番技法「橋を架けるドミナントセブンス」の響きを覚えて応用できるようにしましょう。

『 ふるさと 』は日本の心象風景を描写する歌詞を持ちながら､どこか異国情緒の漂う楽曲になっているのですが、それは讃美歌の影響を受けているからのようです。サブドミナントからトニックに解決する教会音楽ゆずりの４１進行― アーメン終止 ―の使い方にも注目してみましょう。

ふるさと

A

I　V　I　I　IV　I　V　I

B

V　I　IV　I

C

I　I　V　I

Comment

【 キーとコード 】

今回の『 ふるさと 』の機能分析は、Ｅフォームのダイアトニック・コードを使って進めていきます。２カポのＤフォームや４カポのＣフォームでも弾けます。

『 ふるさと 』の機能分析で使うキー

【 ふるさと 】

Key in E

Play D (Capo2)　　Play C (Capo4)

『 ふるさと 』はスリー・コードで弾ける楽曲です。Ｅキーのダイアトニック・コードとスリー・コードを確認しておきましょう。

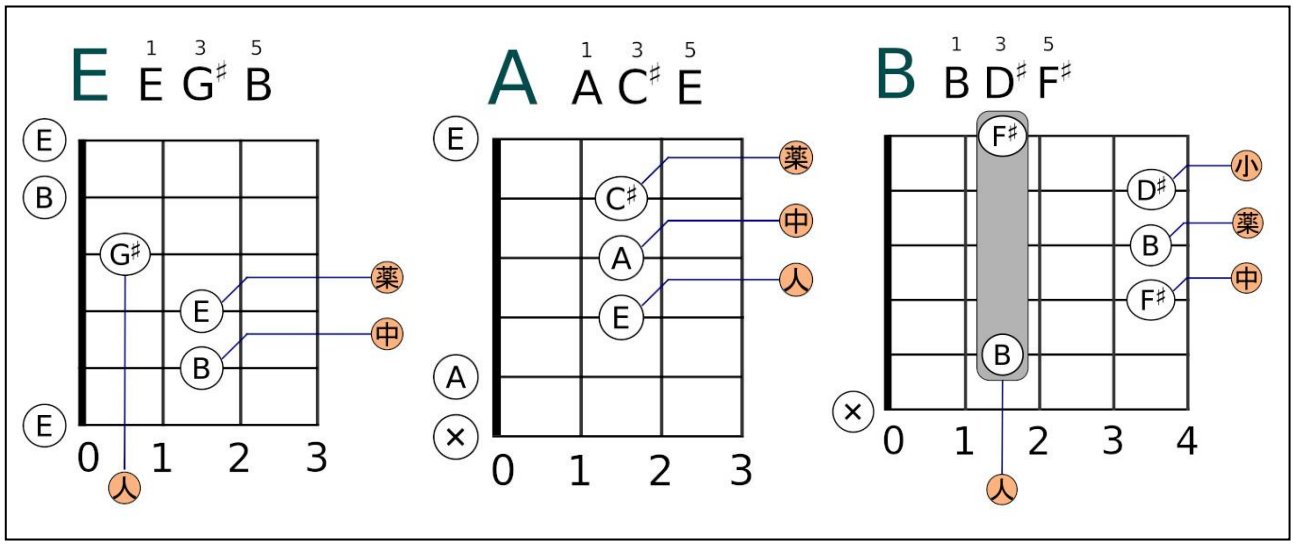
Ｅキーのダイアトニック・コードとスリー・コード

Ⅰ	Ⅱm	Ⅲm	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵm	Ⅶdim
E	F♯m	G♯m	A	B	C♯m	D♯dim

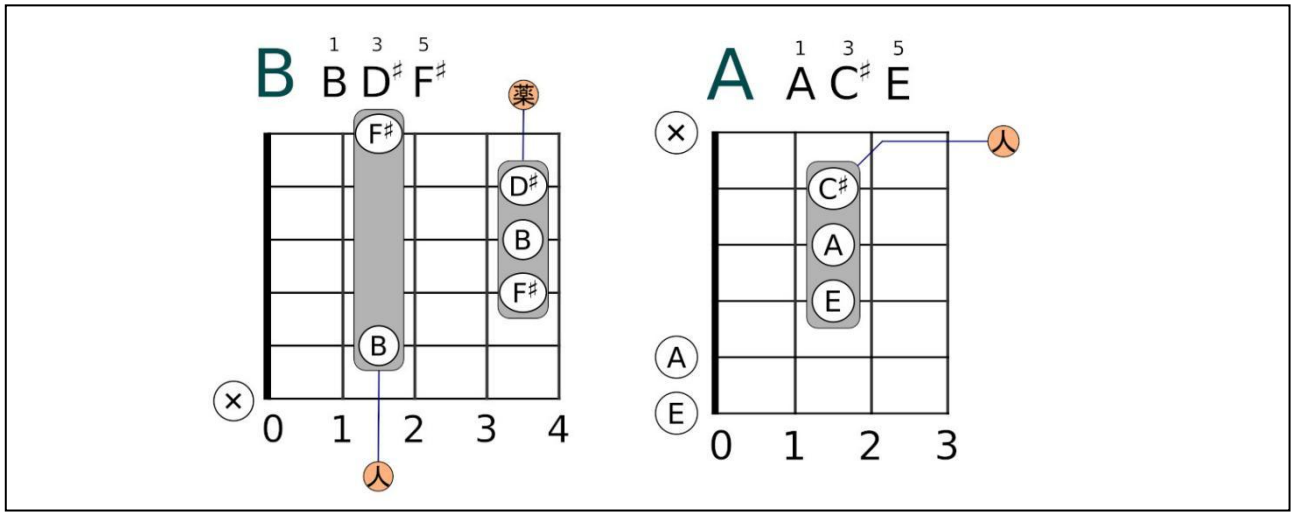
Ｅフォームのスリーコード(主要三和音)

Ⅰ	Ⅳ	Ⅴ
E	A	B

Ｅフォームの場合、トニックのⅠはＥ、サブドミナントのⅣはＡ、ドミナントのⅤはＢです。

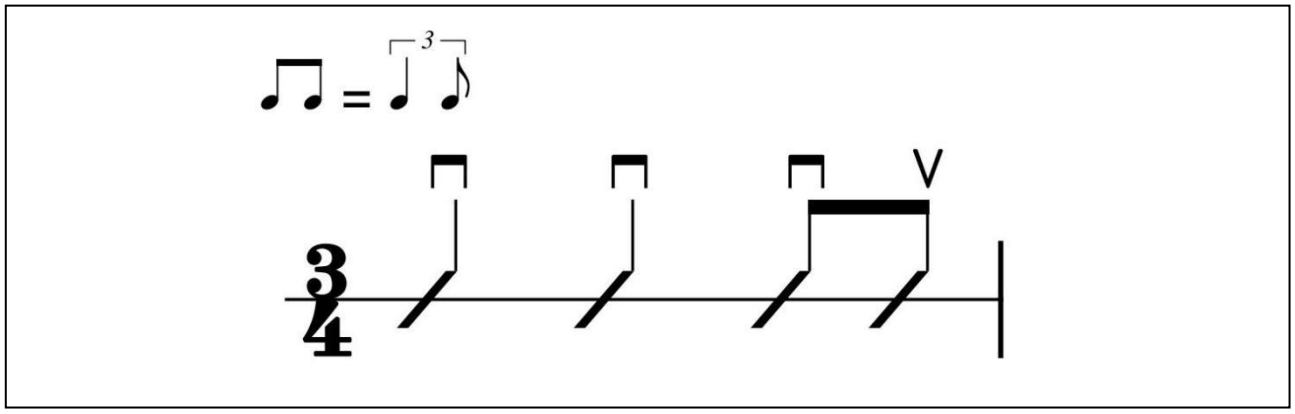


ＡとＢのコード・フォームは三本の指をピッタリくっつけるようにして押さえます。下図のような一本指フォームの方が押さえやすい場合もあります。



ストローク・パターンはこんな感じになります。４分の３拍子のシャッフル・ストロークです。

『 ふるさと 』のストローク・パターン(シャッフル・ストローク)

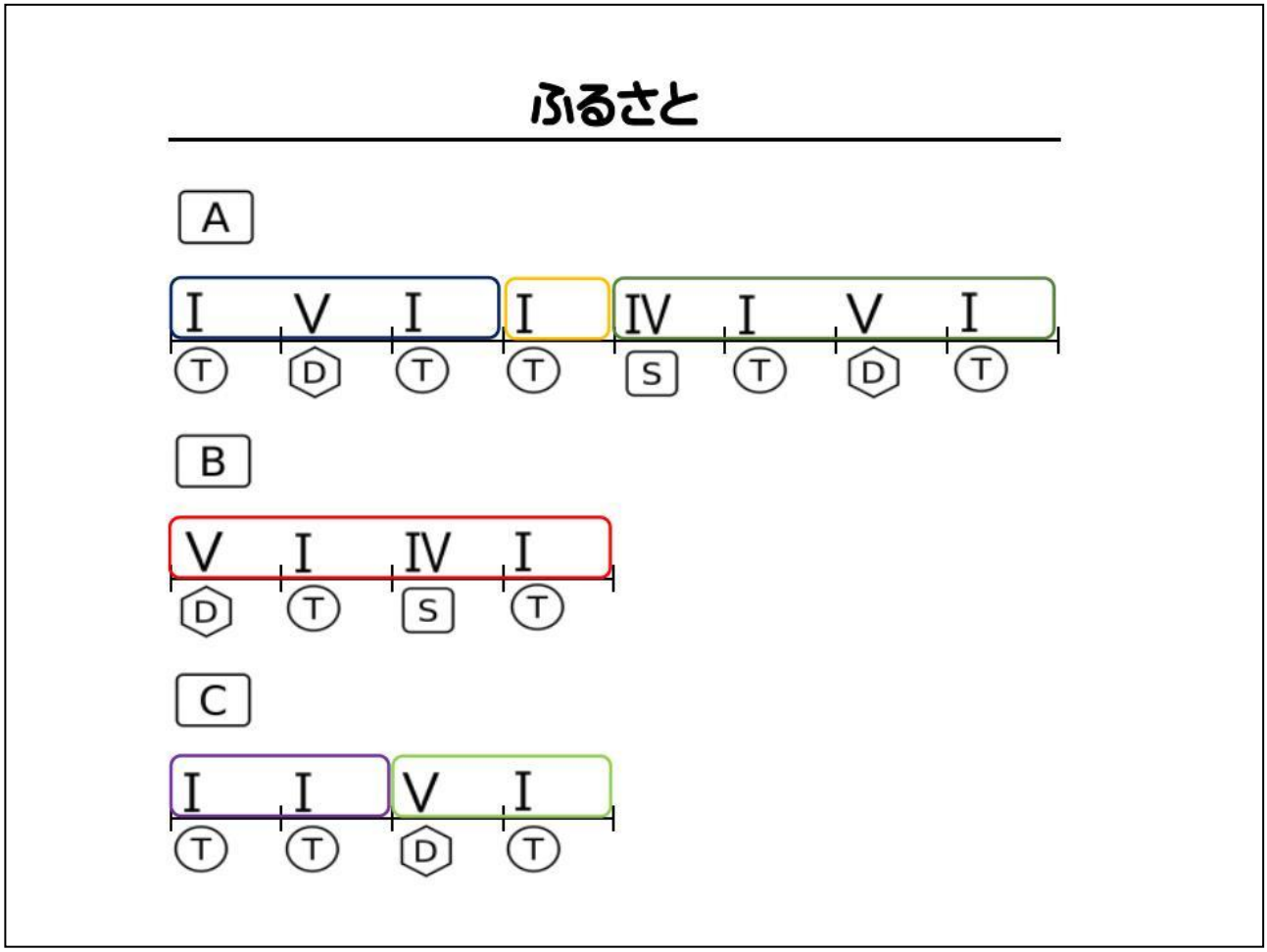


Comment

【 コード進行 】

まず最初に『 ふるさと 』のコード進行全体を俯瞰(ふかん)しておきましょう。

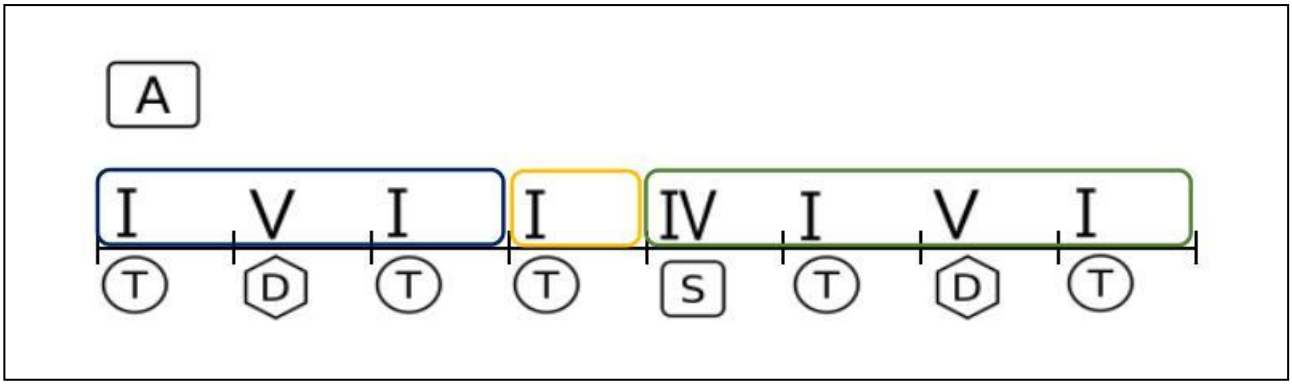
『 ふるさと 』の一本線コード譜



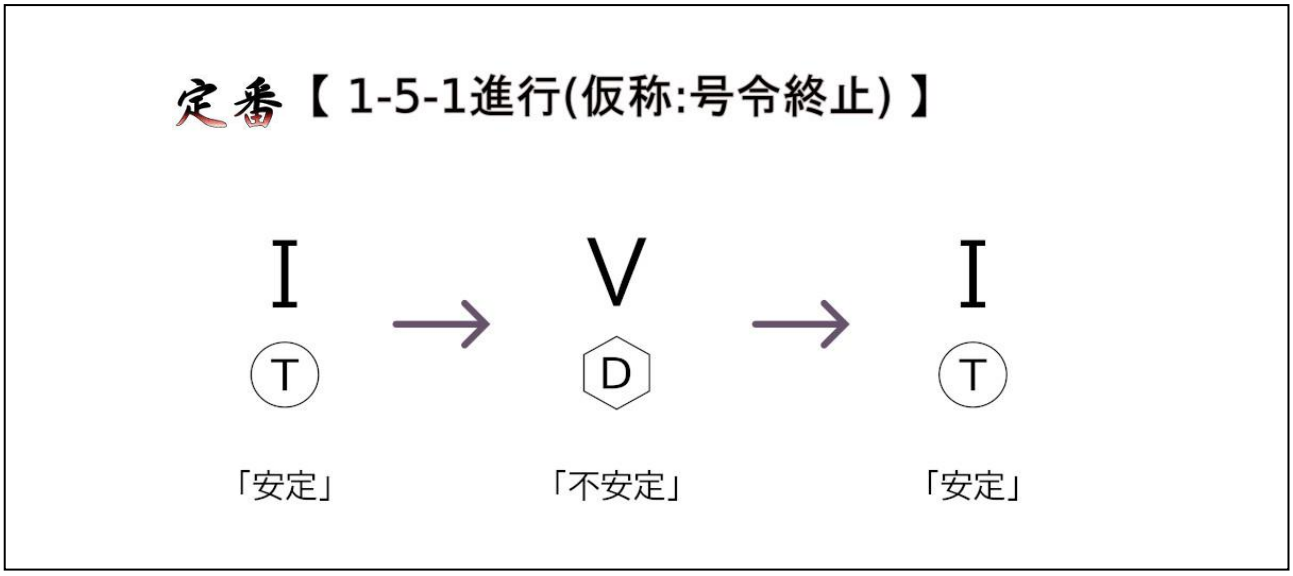
全体を通してトニックのⅠとサブドミナントのⅣとドミナントのⅤのスリー・コードで構成された楽曲であることがわかります。

Ａメロ・Ｂメロ・Ｃメロの各セクションを機能分析していきましょう。

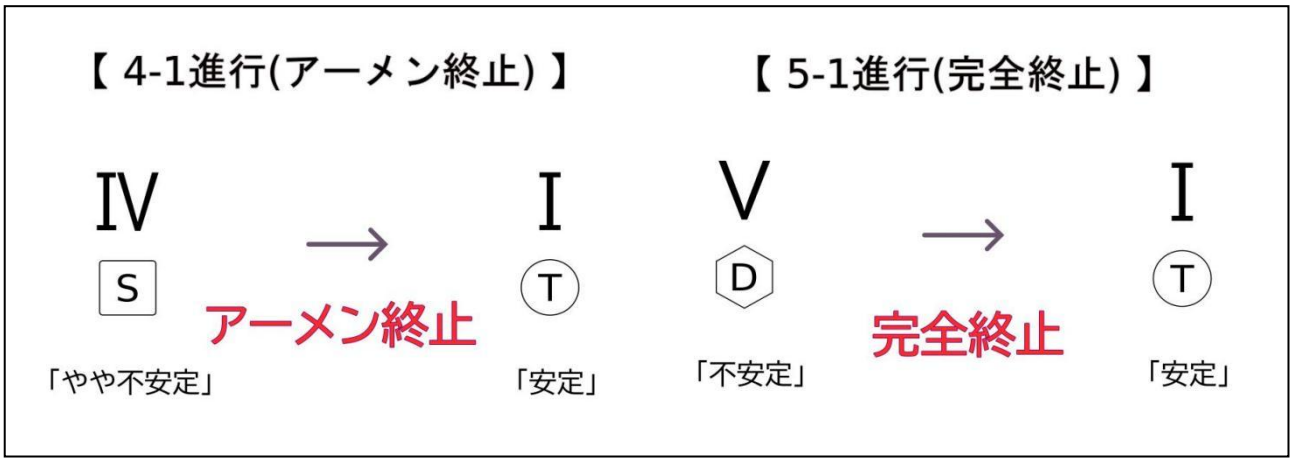
Ａメロ



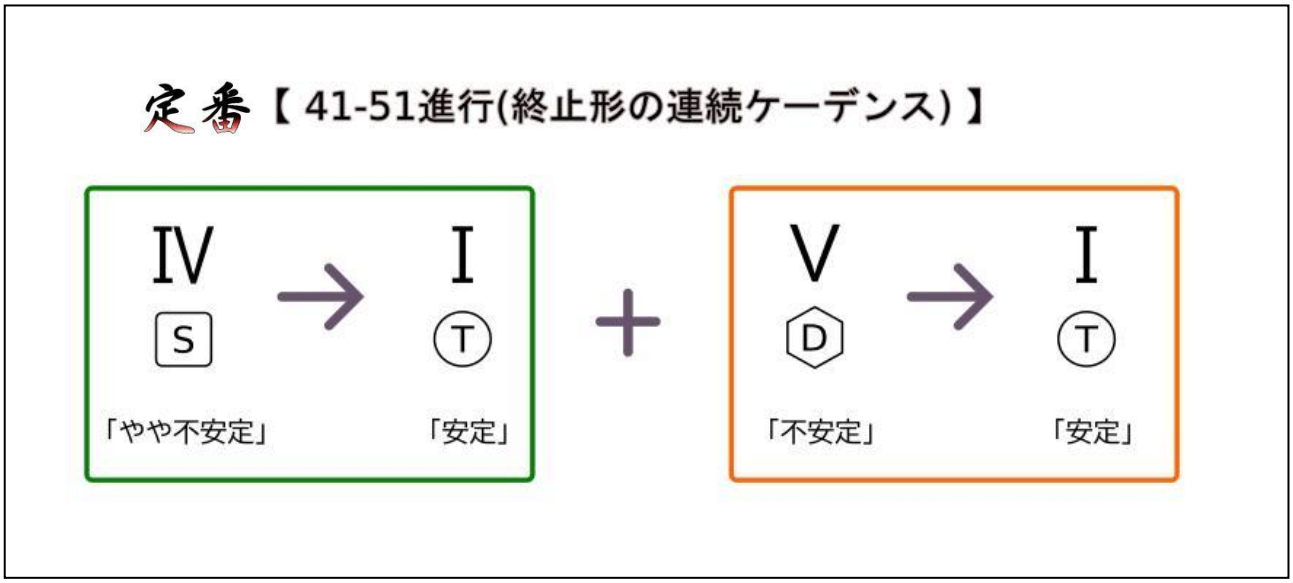
Ａメロは定番の１５１進行（号令終止）と４１−５１進行（終止形の連続ケーデンス）の間をＩで繋いでいると考えると把握しやすいとおもいます。



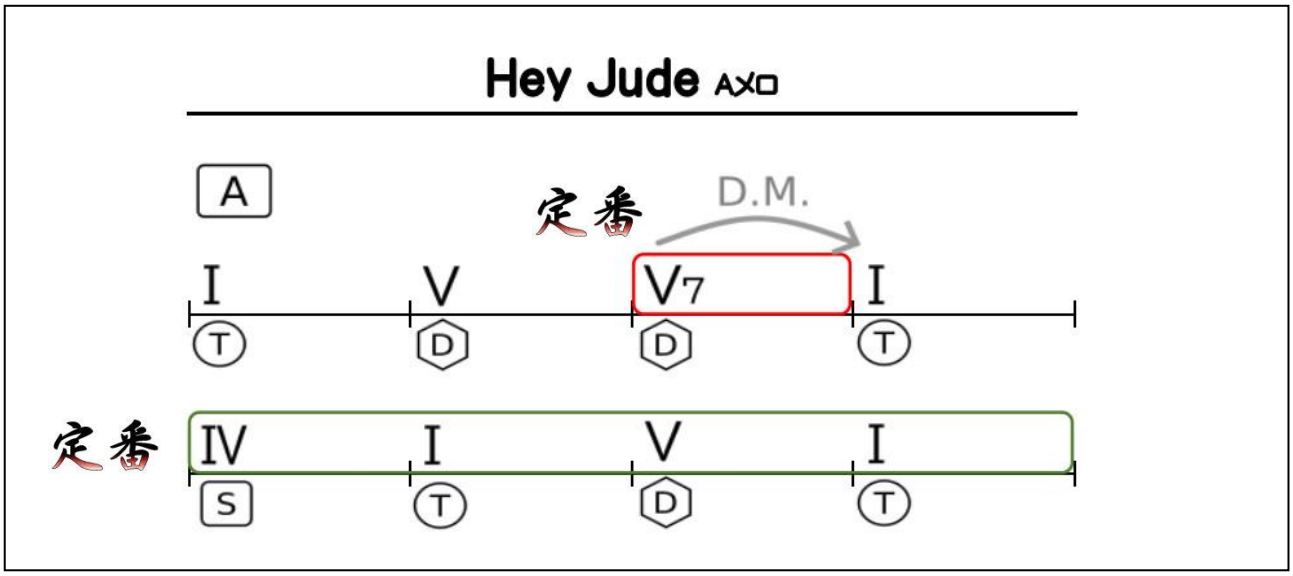
Ａメロ前半の１５１進行は「起立・礼・着席」の号令でお馴染みの号令終止です。Ａメロ後半のアーメン終止の４１進行と完全終止の５１進行を組み合わせた４１−５１進行もお馴染みの定番と言っていいものかもしれません。



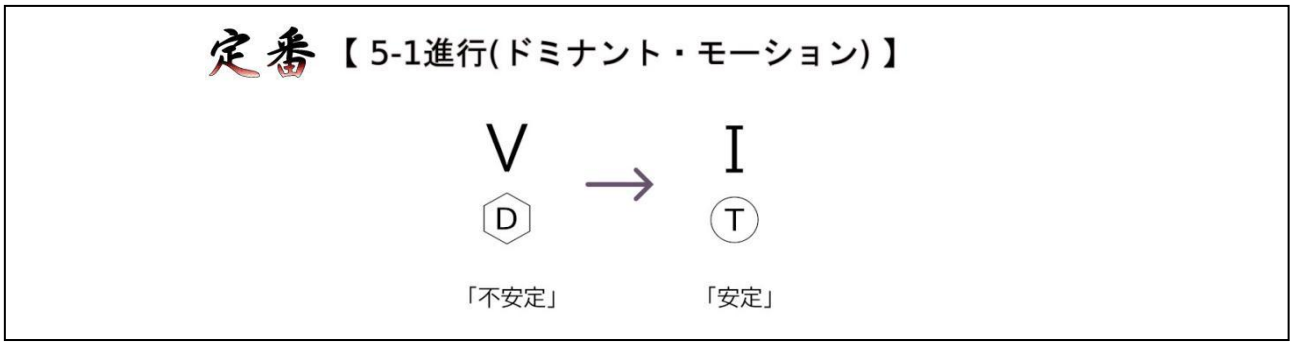
４１−５１進行は、やや不安定のサブドミナントから安定のトニックへと向かうアーメン終止でフワッと終わるように見せかけた後に、不安定のドミナントから安定のトニックにしっかり着地して完全終止していると考えられるケーデンスです。



この教会音楽ゆずりの４１進行― アーメン終止 ―の使い方が『 ふるさと 』の持つ異国情緒の正体で、この終止形の連続ケーデンスはビートルズの『 Hey Jude 』(1968)のＡメロ後半部分でも使われています。こうした伝統的なケーデンスは世界中のどの民族であろうと郷愁を誘うことができるという普遍的な魅力があるようです。

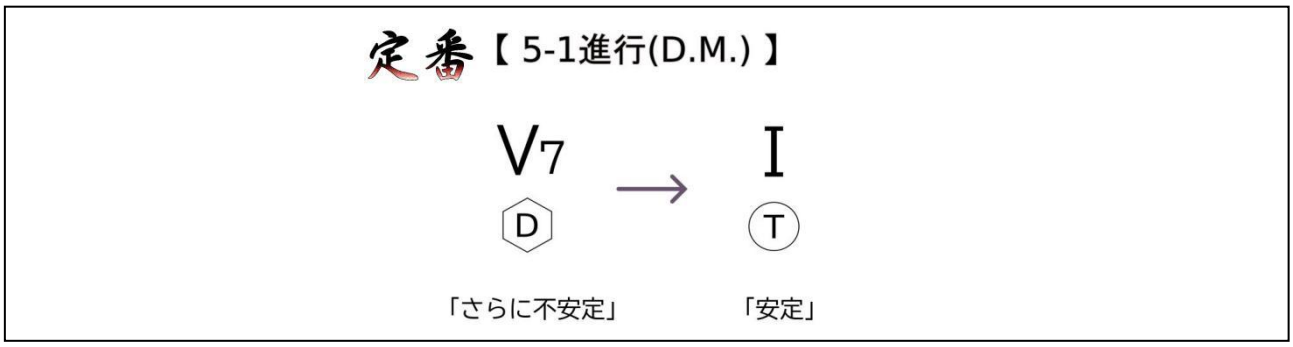


また『 Hey Jude 』のＡメロの前半部分で使われているＶ７(ドミナントセブンス)は、リハーモナイズの定番テクニックの一つです。その響きを覚えて『 ふるさと 』のリハーモナイズにも応用してみましょう。

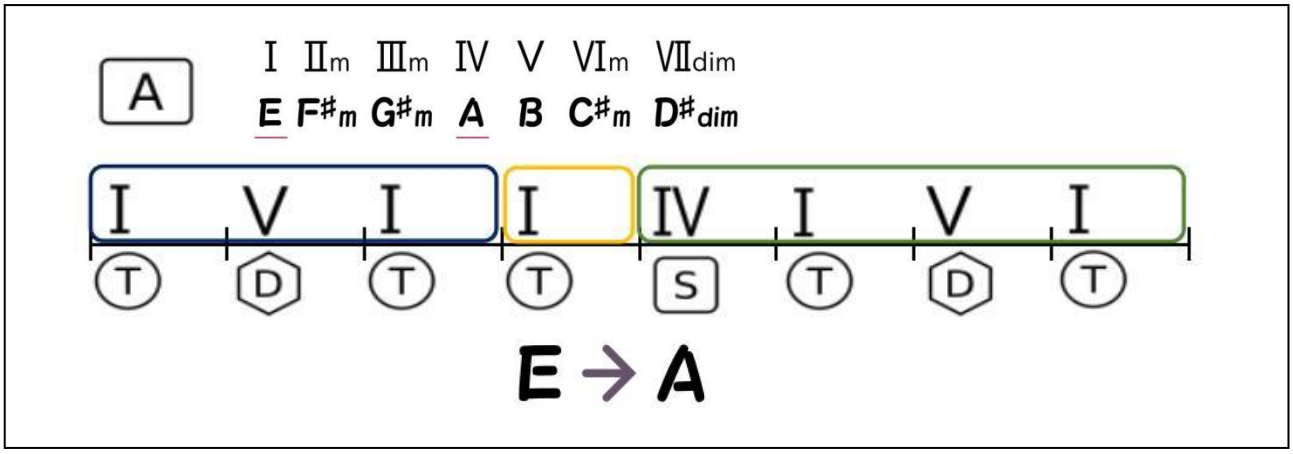


５１進行(ファイブ・ワン)は、不安定のドミナントから安定のトニックに解決する“ドミナント・モーション”と呼ばれるケーデンスですが、『 Hey Jude 』のＡメロの前半部分ではＶのドミナントをＶ７(ドミナントセブンス)に置き換えることで「さらに不安定」な響きにしています。こうすることでト

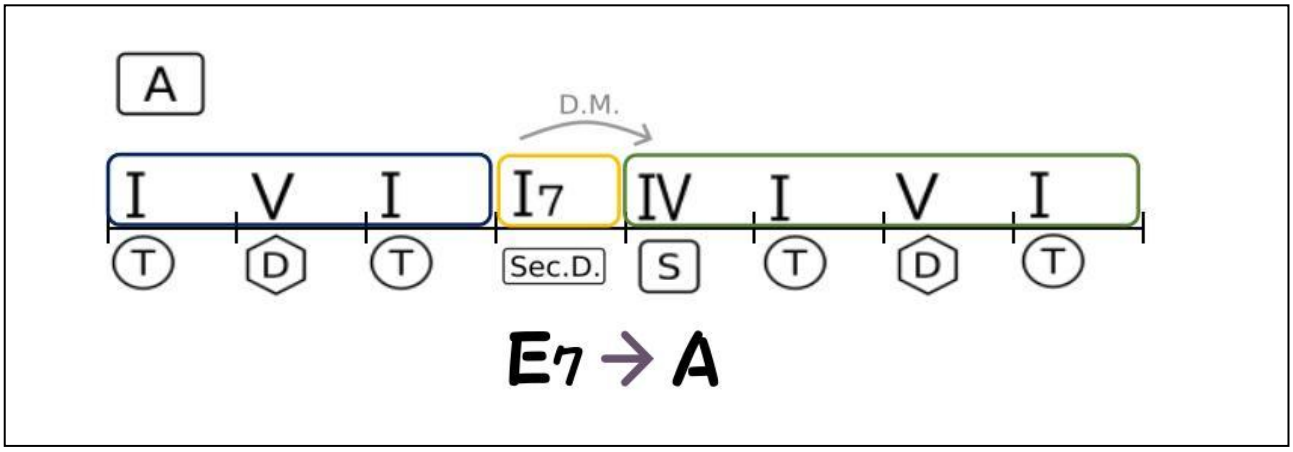
ニックのＩに解決したときの安定感を増幅させているわけです。



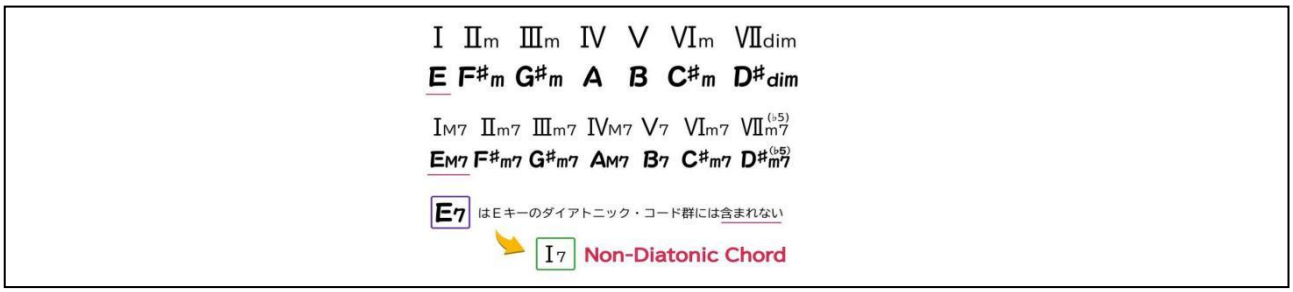
一方で『 ふるさと 』のＡメロには、１５１進行と４１−５１進行の間をトニックのＩで繋ぐ「Ⅰ→Ⅳ」のケーデンスがありますが、このＩをＩ７に置き換えることも“ドミナント・モーション”と考えられます。



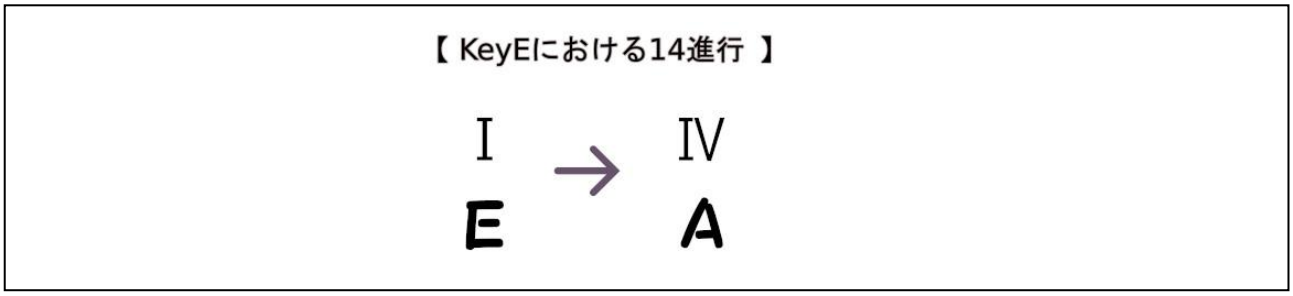
「Ⅰ→Ⅳ」はＥキーを基準にするとＥのコードからＡのコードに移動していきます。このＩのＥをＩ７のＥ７に置き換えてＥ７→Ａという進行にしようというわけですが…



そうするとＥキーのダイアトニックコード群には存在しないノン・ダイアトニックコード（Ｉ７）が登場してきます。弾いてみるとＩ７前後の１５１進行と４１−５１進行の間に橋を架けるように響いてくると思いますが、このＩ７を導く技術を身に着けてリハーモナイズに応用できるようにしましょう。

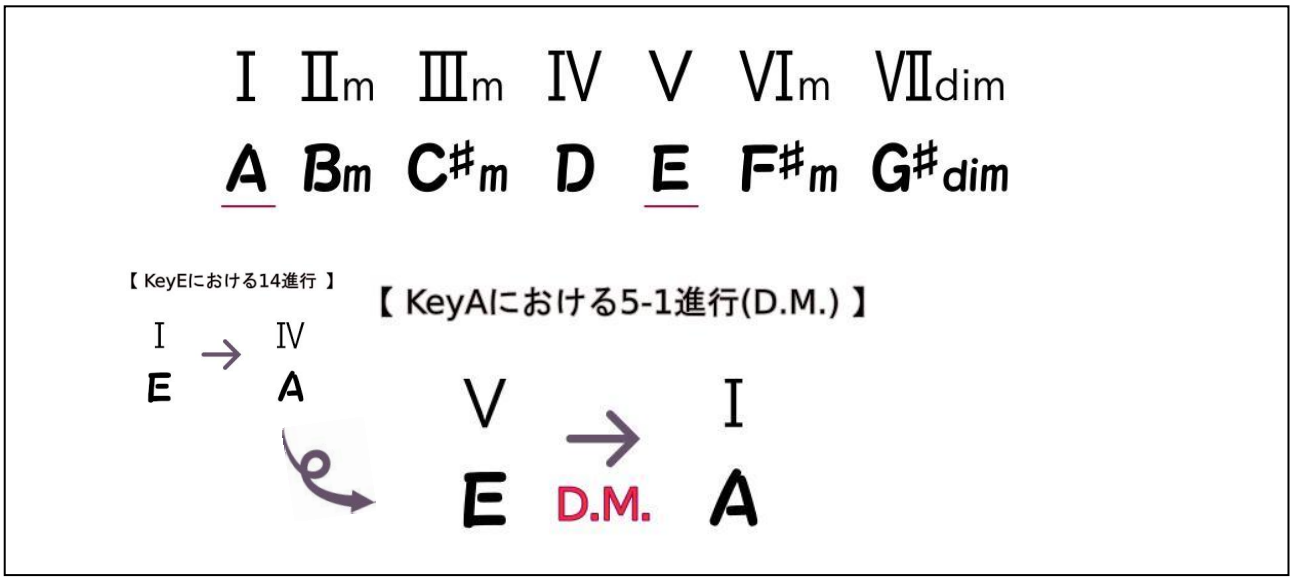


Ｅキーにおいて Ｅから Ａに移行する１４進行は、一見すると Ｖから Ｉに解決する“ドミナント・モーション”にはみえないかもしれません。

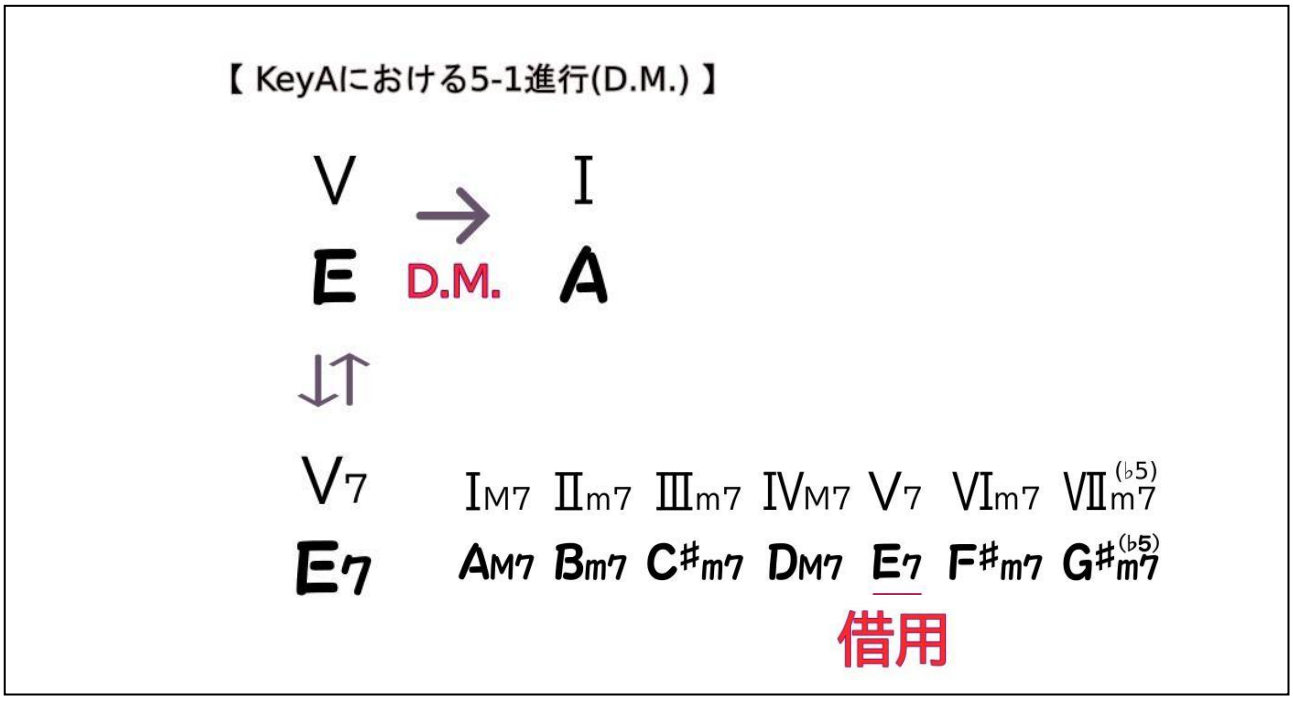


しかしながらⅣのＡをトニックのＩとみなした場合— すなわちＡキーに部分転調していると考えると —直前のＥのコードはＡキーのダイアトニック・コードのＶに相当します。

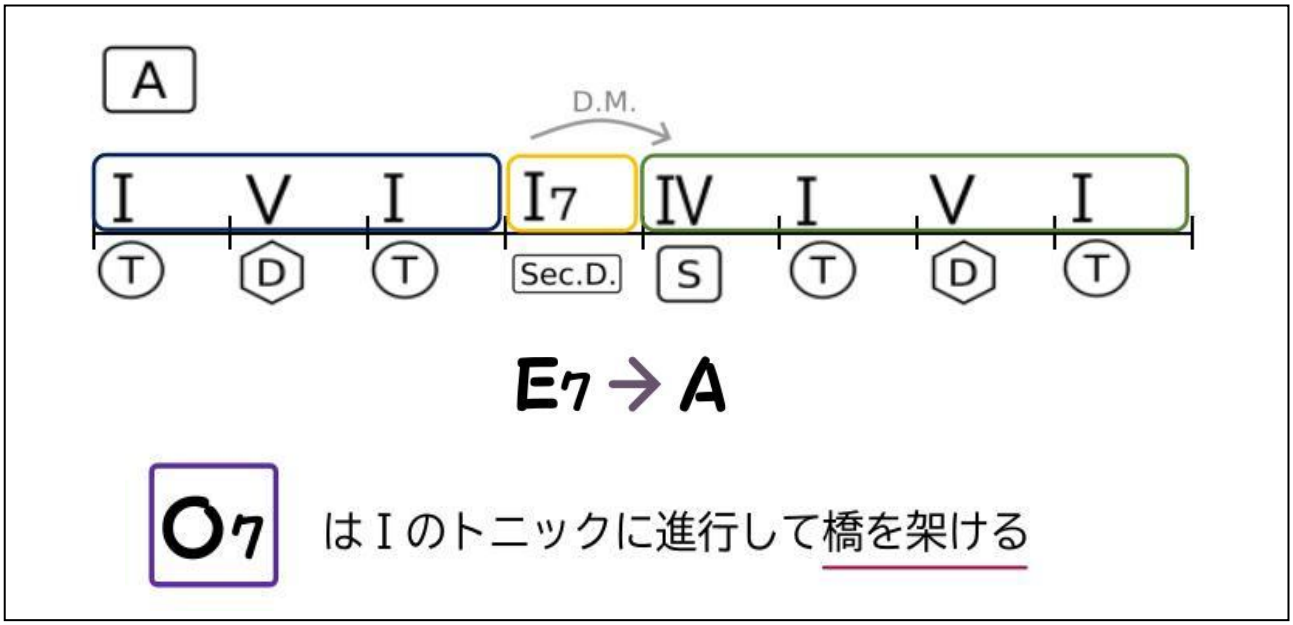
つまりＥキーにおける１４進行（Ｅ→Ａ）は、Ａキーの５１進行（ファイブ・ワン）とみなすこともできるわけです。ここに“ドミナント・モーション”が成立しています。



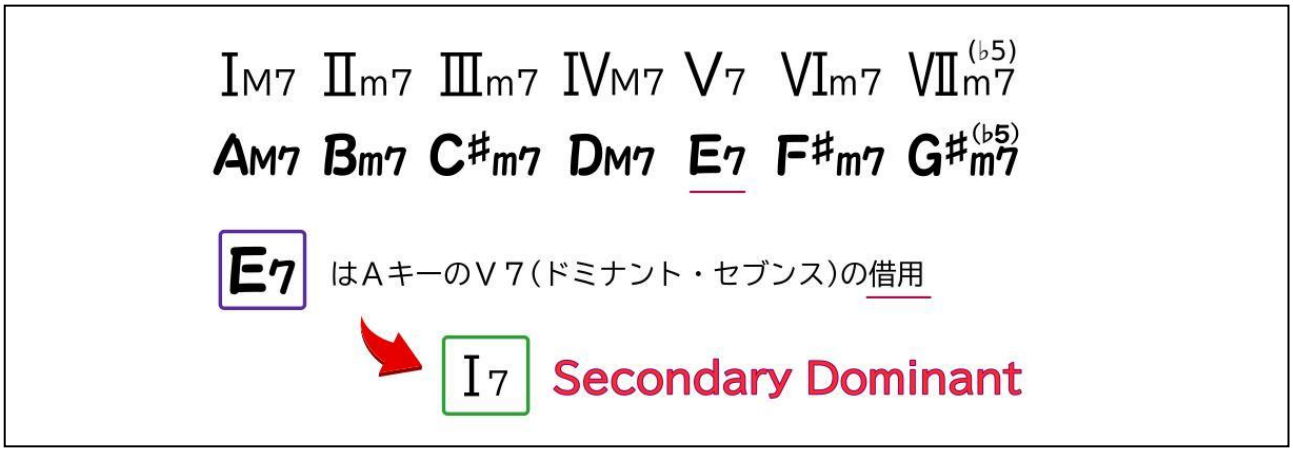
さらに直前のＥのコードをＥ７に置き換えるのですが、そのときはＡキーの四和音のダイアトニックコード群のＶ７（ドミナントセブンス）を借りてきたものと考えます。



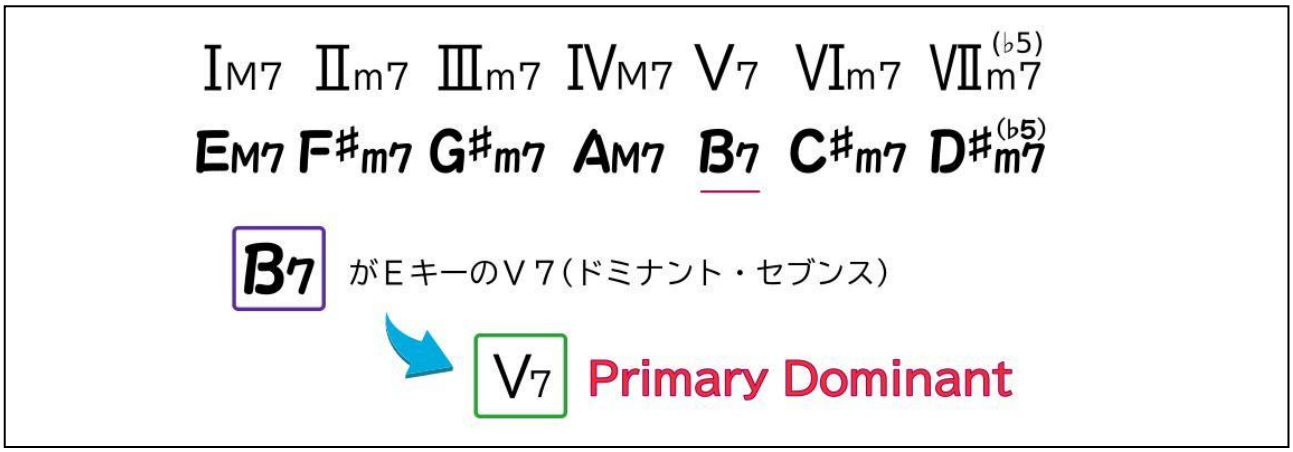
Ｖ７（ドミナントセブンス）の響きは「不安定」なＶよりも「さらに不安定」な響きです。そのためＶ７はトニックのＩに解決しようとする推進力がより強くなります。



ということで『ふるさと』のＡメロ４小節目のＩをＩ７に置き換えると、その前後の１５１進行と４１−５１進行の間に橋を架けているように聞こえます。このように〇７には「Ｉのトニックに進行して橋を架ける機能がある」と覚えておきましょう。

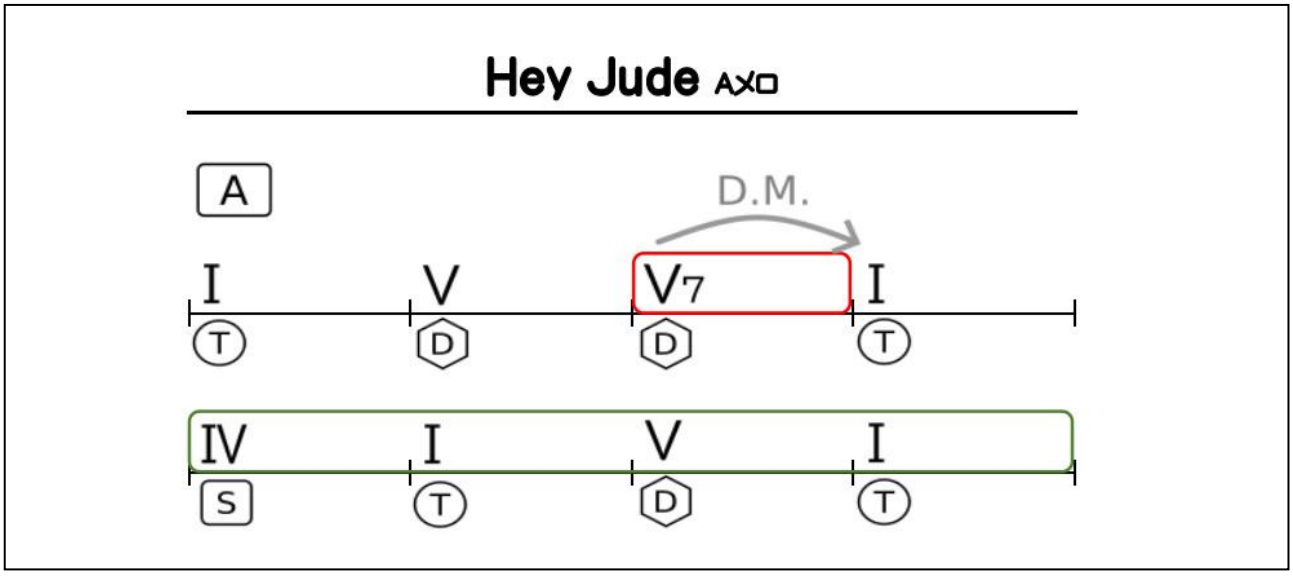


このＥ７は曲の主たるキー（Ｅ）とは別のＡキーのダイアトニック・コード群からＶ７を借りてきたと考えることから“セカンダリー・ドミナント”と呼びます。

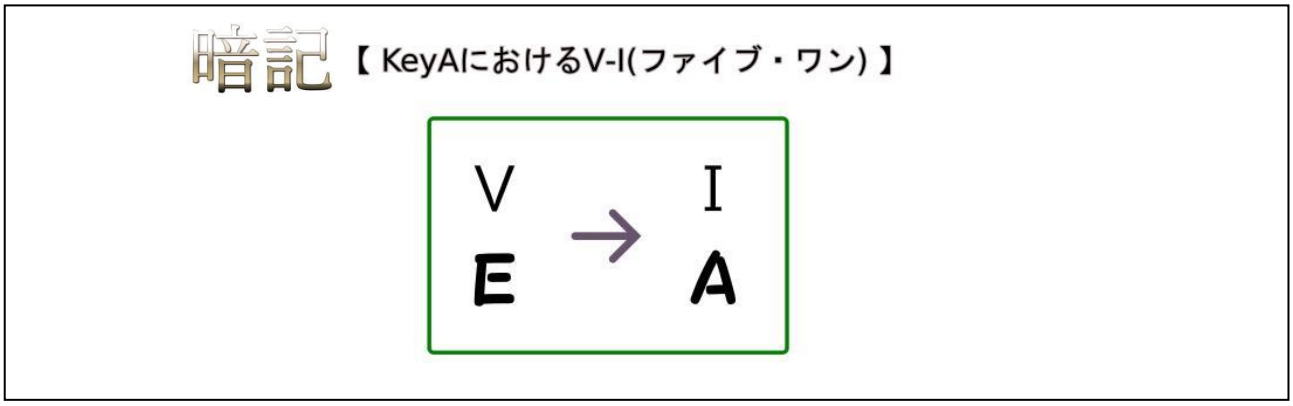


「二次的な」という意味の“セカンダリー”という名称で呼ぶのは、曲の主たるキーのＶ７（ドミナ

ントセブンス）と区別するためで、曲の主たるキーのＶ７（ドミナントセブンス）の方は「主要な」という意味で“プライマリー・ドミナント”と呼びます。
　Ｅキーにおけるｖ７はＢ７ですから、Ｂ７がプライマリー・ドミナントというわけです。

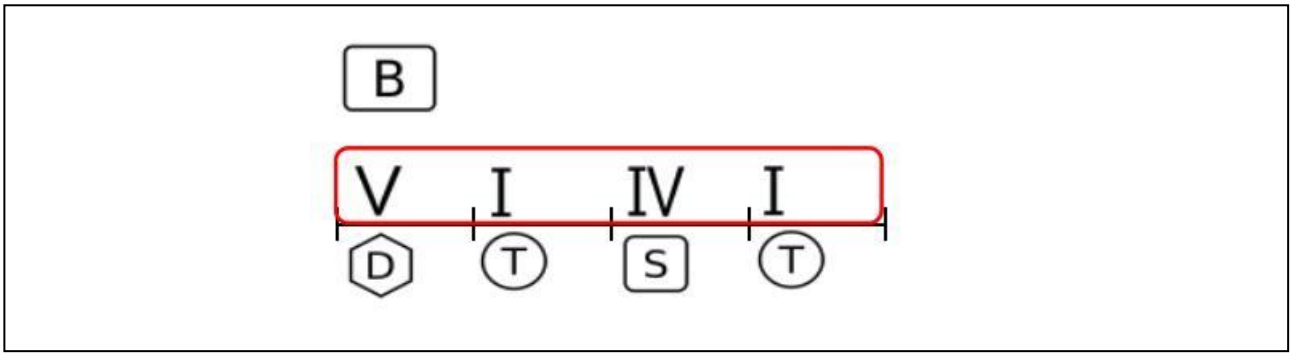


『 Hey Jude 』のＡメロに登場するＶ７（ドミナントセブンス）は、曲の主たるキーのＶ７なので“プライマリー・ドミナント”ということになります。

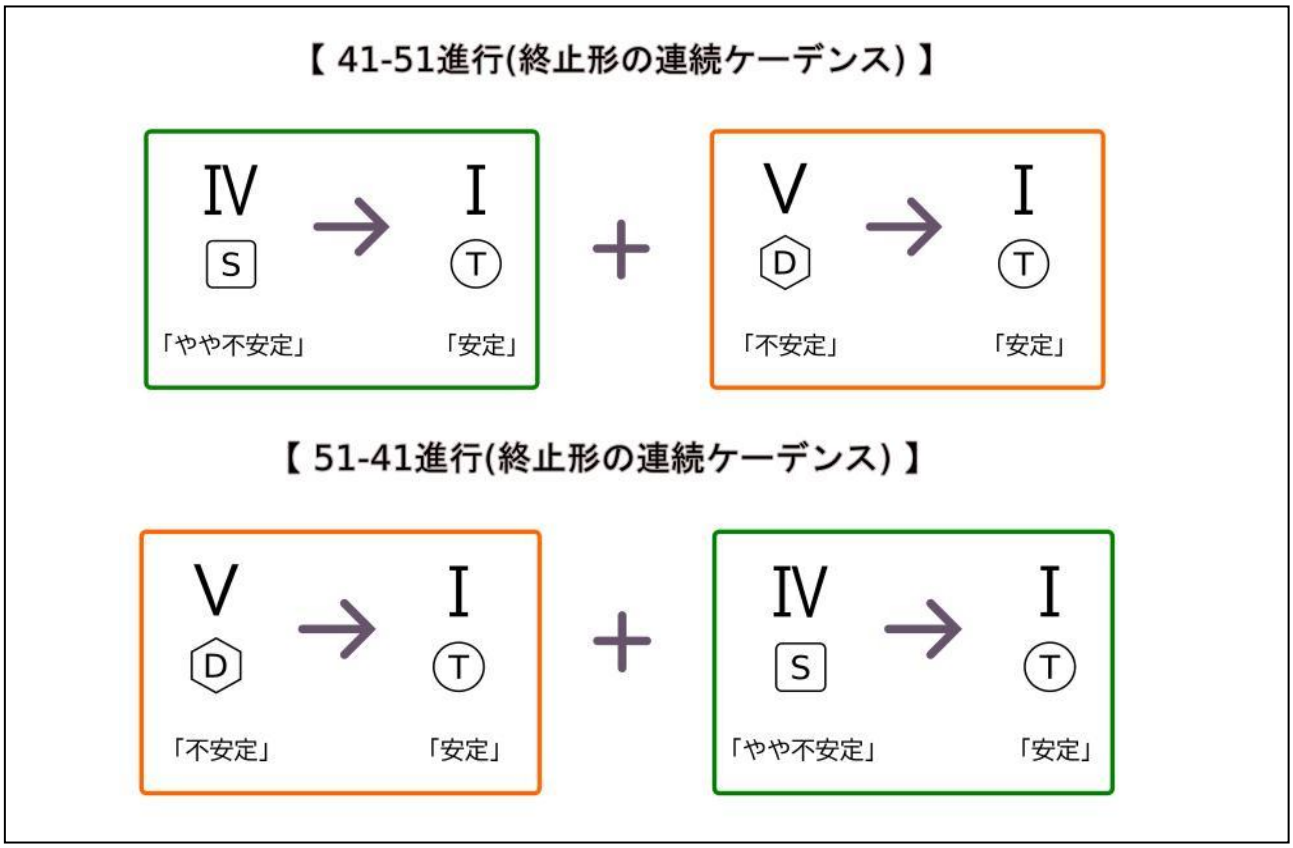


　プライマリー・ドミナントからトニックおよびセカンダリー・ドミナントからトニックへと向かう５−１進行のドミナント・モーションは、よく使われる定番進行ですから頻繁に出くわすことになるとおもいます。各キーにおける“ファイブ・ワン”の組み合わせを、その都度覚えていくようにすると色々な場面で応用が利くようになるでしょう。

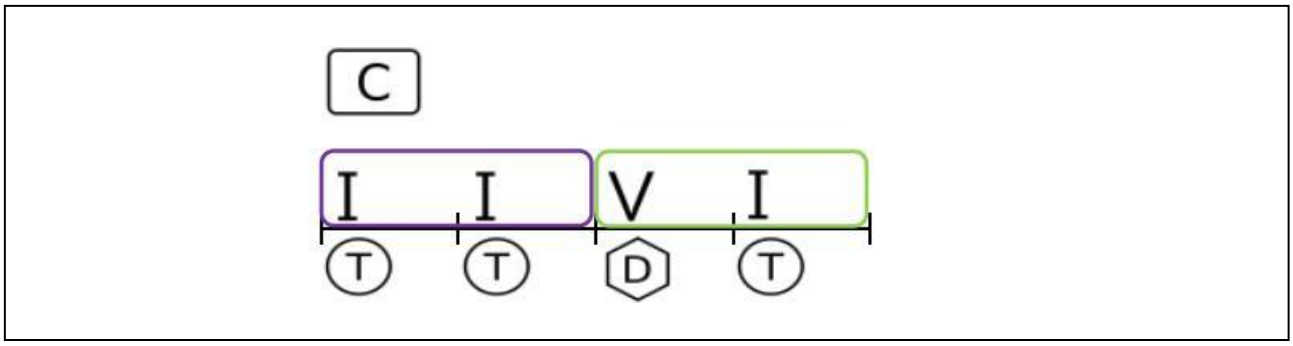
Ｂメロ



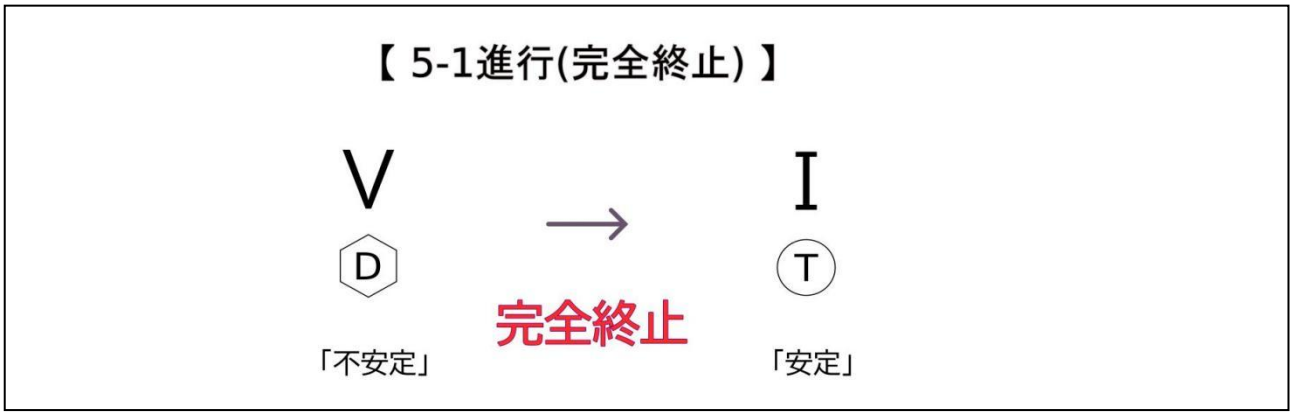
『 ふるさと 』のＢメロは５１−４１進行です。Ａメロの後半で登場した４１−５１進行を逆にした終止形の連続ケーデンスだと考えると覚えやすいかもしれません。



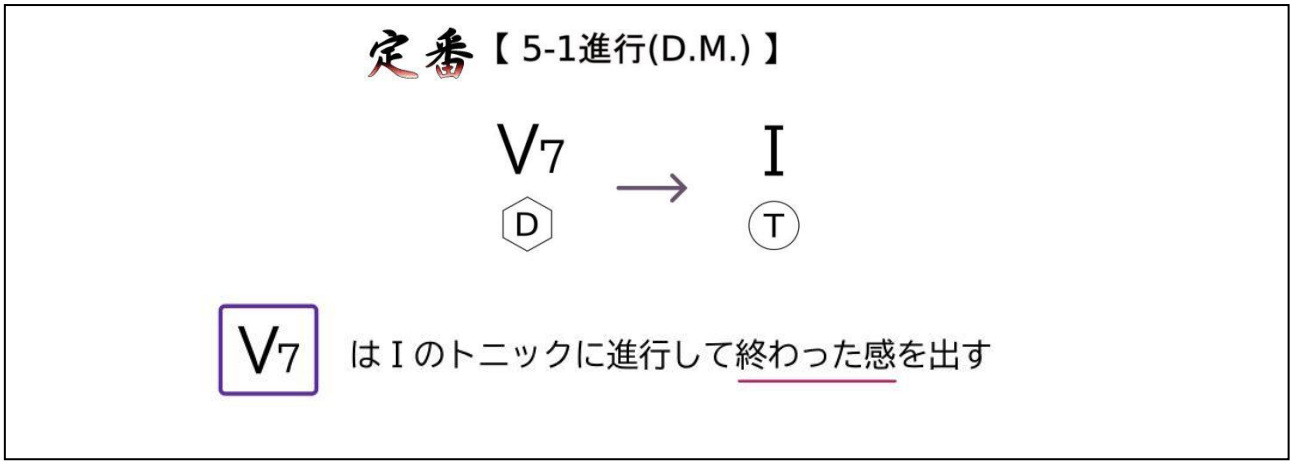
▌Ｃメロ



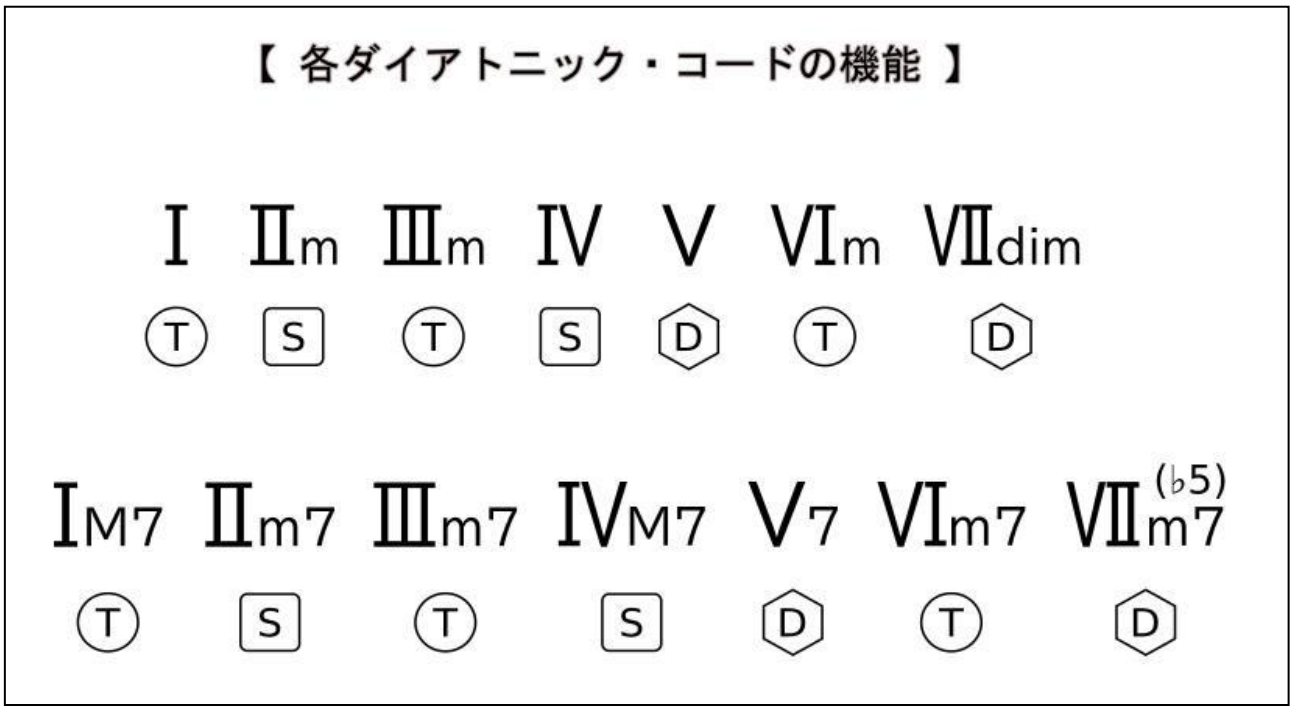
『 ふるさと 』のＣメロは、トニックのＩを２連続した後、５１進行の完全終止で曲を終えます。



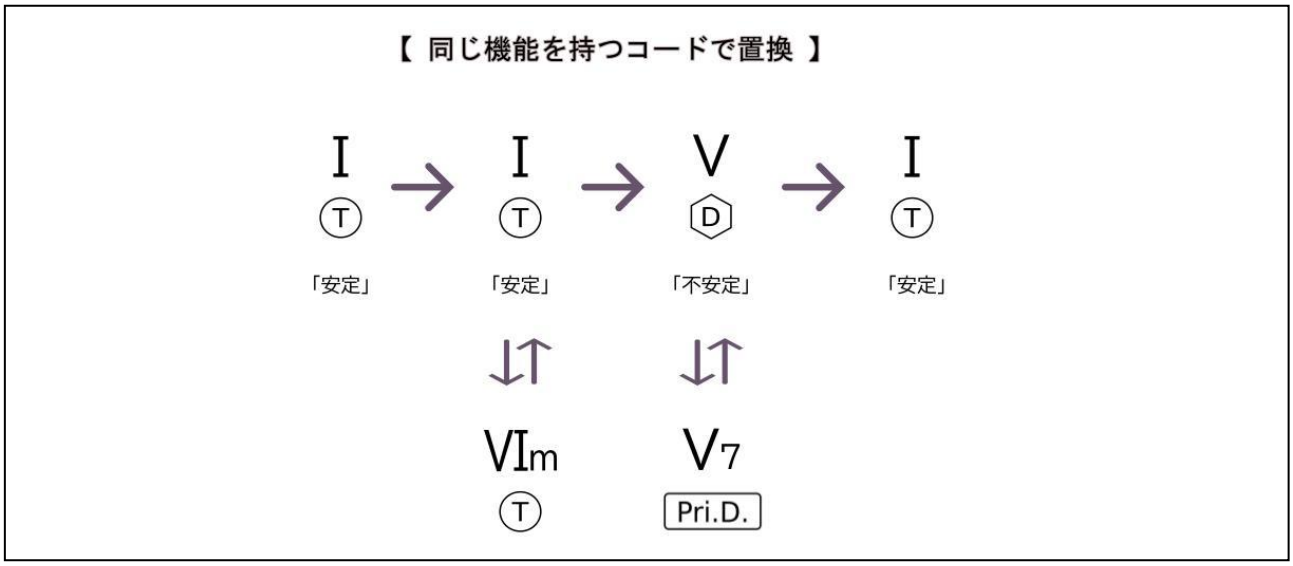
５−１進行のドミナント・モーションは「完全終止」とも言われるように曲の最後で「終わった感」を出すための常套句ですが、Ｖを「さらに不安定」な響きのＶ７（ドミナントセブンス）に置き換えることで「終わった感」をより強く感じさせることもよく行われます。



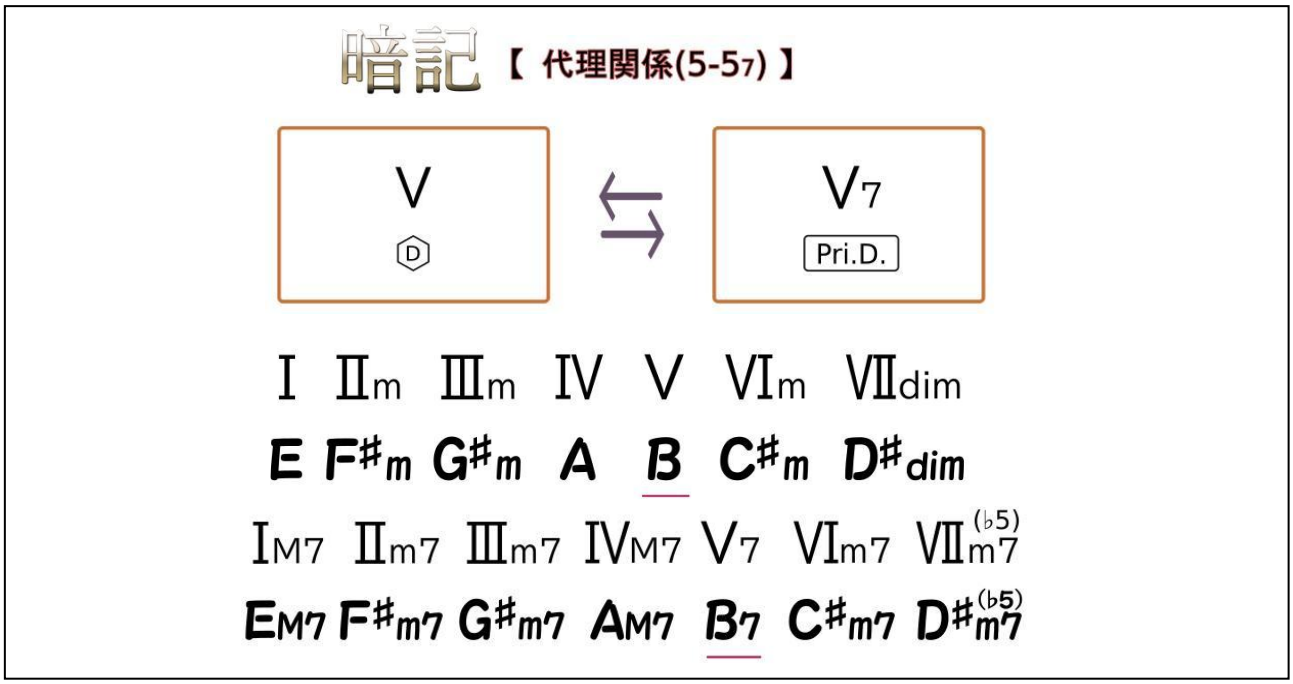
それはようするに同じドミナントの機能を持つ代理コードに置き換えているわけですが、『 ふるさと 』のＣメロ前半のようにトニックの機能を持つ和音が連続する場合も、少々冗長に聴こえるコードの響きに変化をもたらすため、同じトニックの機能を持つ代理コードに置き換えることがよくあります。



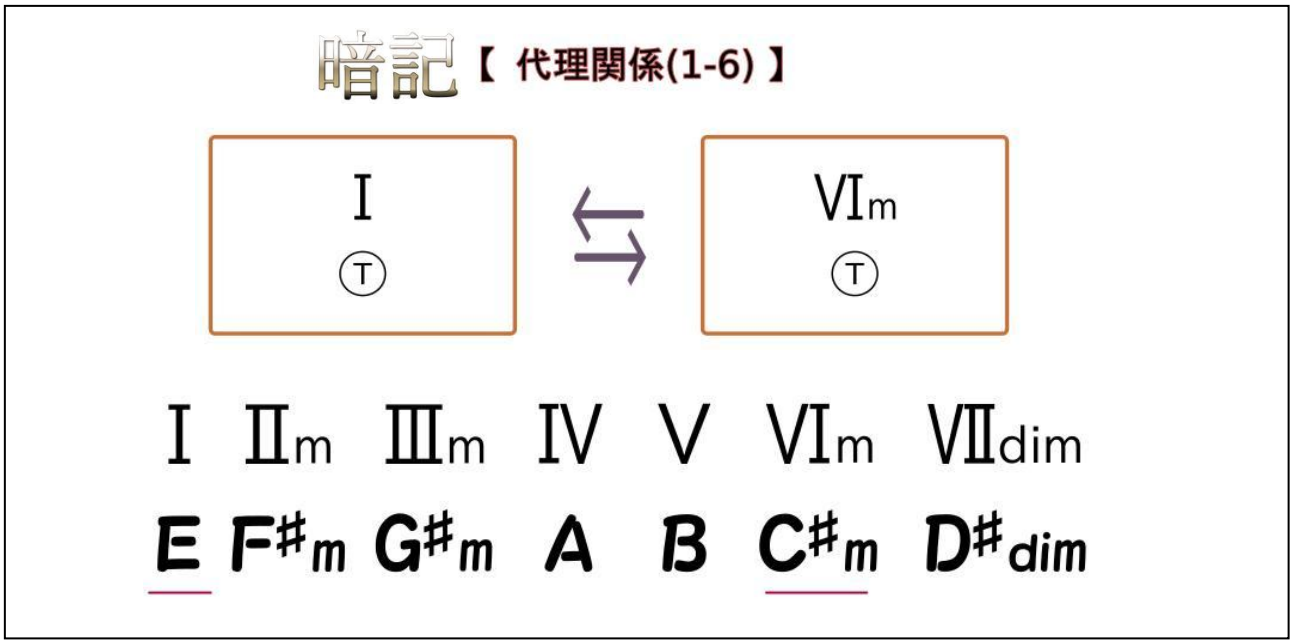
つまり同じ機能を持つ和音同士ならば基本的に置き換えが可能ということです。ダイアトニック・コード群の各コードにはそれぞれ固有の役割があり、同じ機能を持つ和音を代理コードとして置き換えてみると、一味違った面白い響きになったりします。



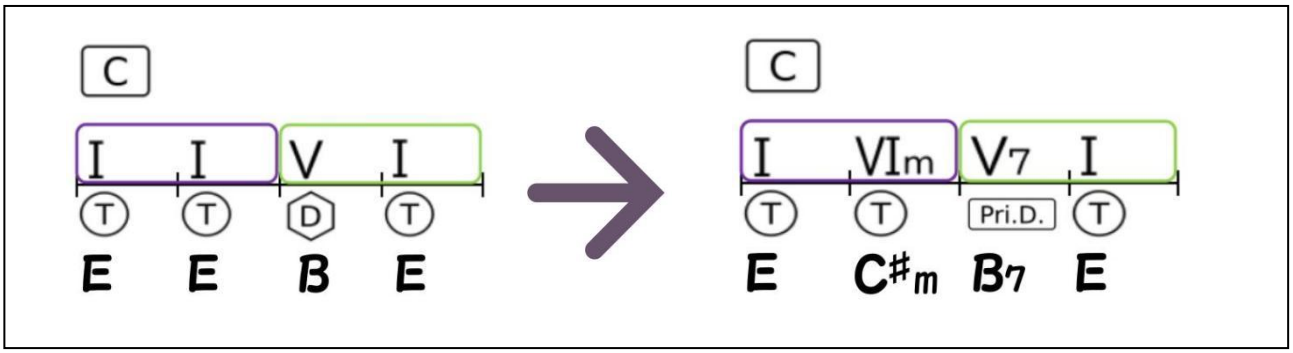
同じドミナントの機能を持つＶとＶ７が置き換え可能な代理関係にあること。それから…



同じトニックの機能をもつＩとⅥｍも置き換え可能な代理関係にあることを暗記しておきましょう。



この知識を『 ふるさと 』のＣメロに応用すれば、２小節目のトニックのＩ（Ｅ）を同じトニックの機能を持つⅥｍ（Ｃ♯ｍ）に置き換えたり、３小節目のドミナントのＶ（Ｂ）を同じドミナントの機能を持つＶ７（Ｂ７）に置き換えて、コードをより鮮やかに響かせることができます。



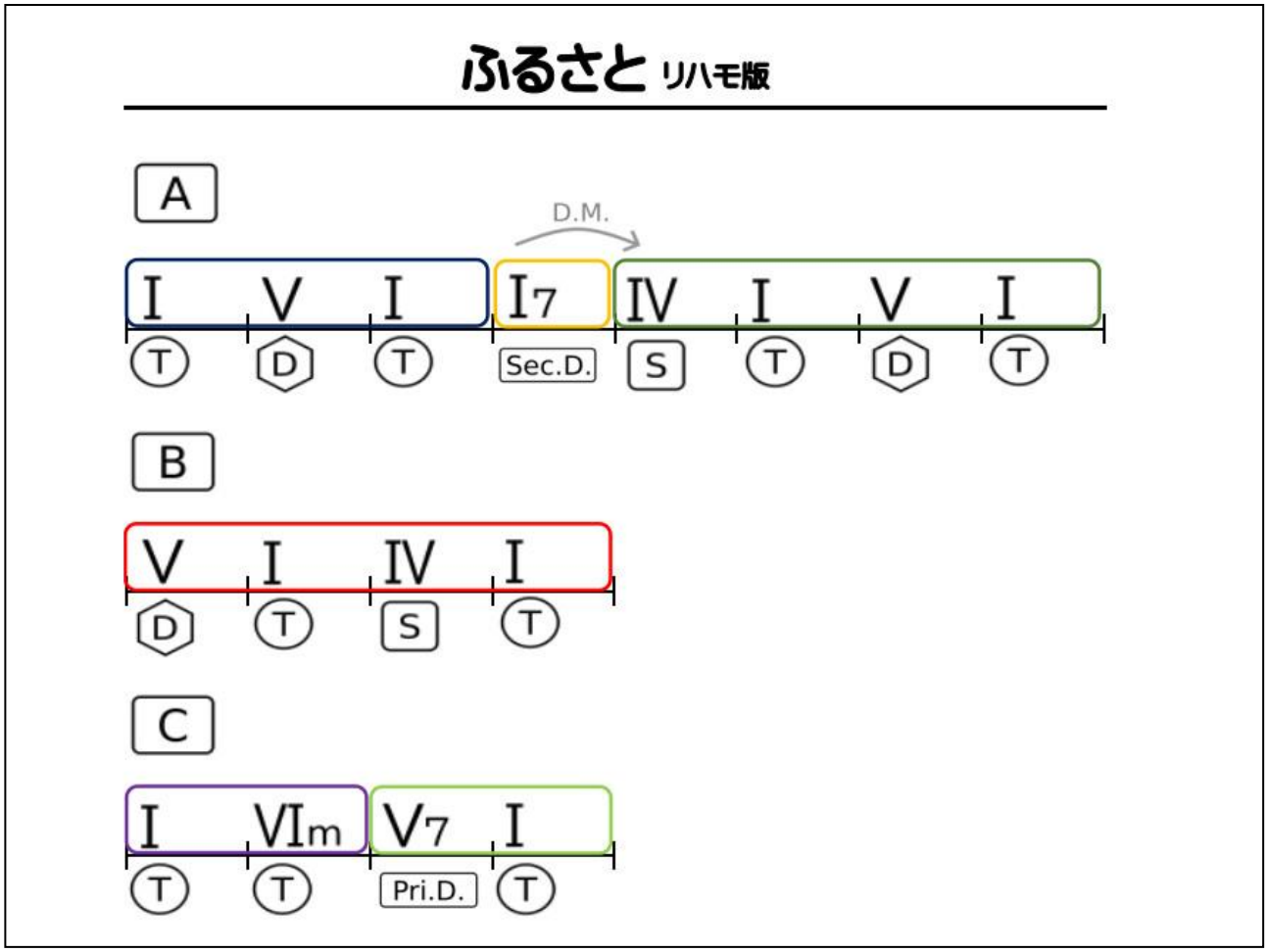
ⅥmのＣ♯mはマイナー・コードであることからメジャー・コードのＥよりも切なく響きます。そのため「忘れがたき古さと」という歌詞を補完する役割が期待できるわけです。

Comment

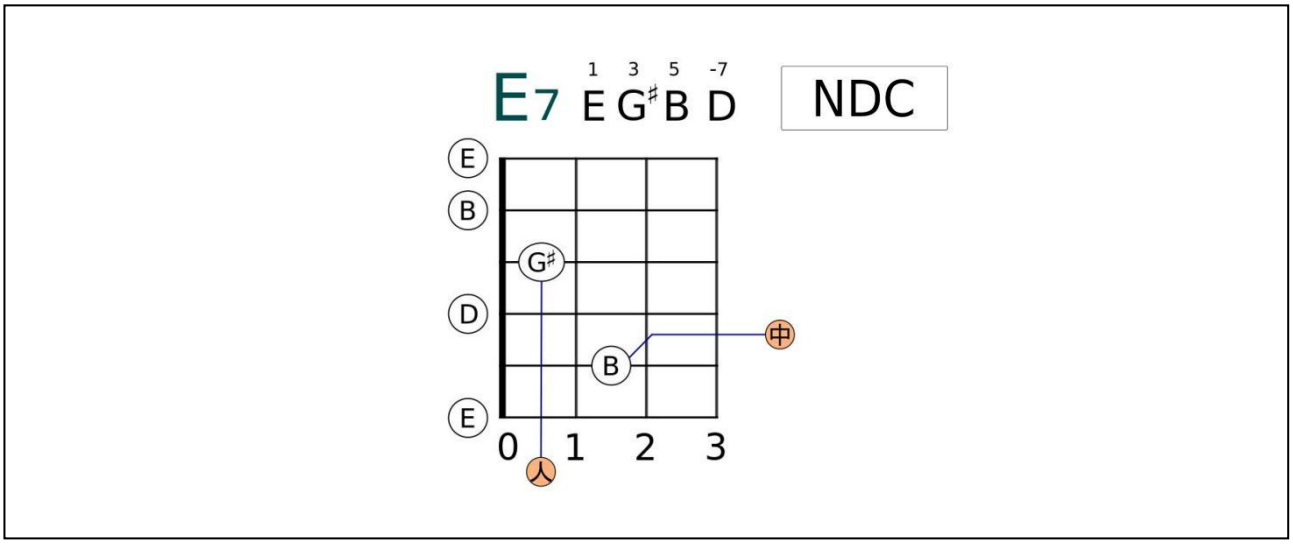
【 リハーモナイズ後のコード・フォーム 】

最後にリハーモナイズで置き換えられたコード・フォームを確認しておきましょう。

▌『 ふるさと 』の一本線コード譜(リハモ版)

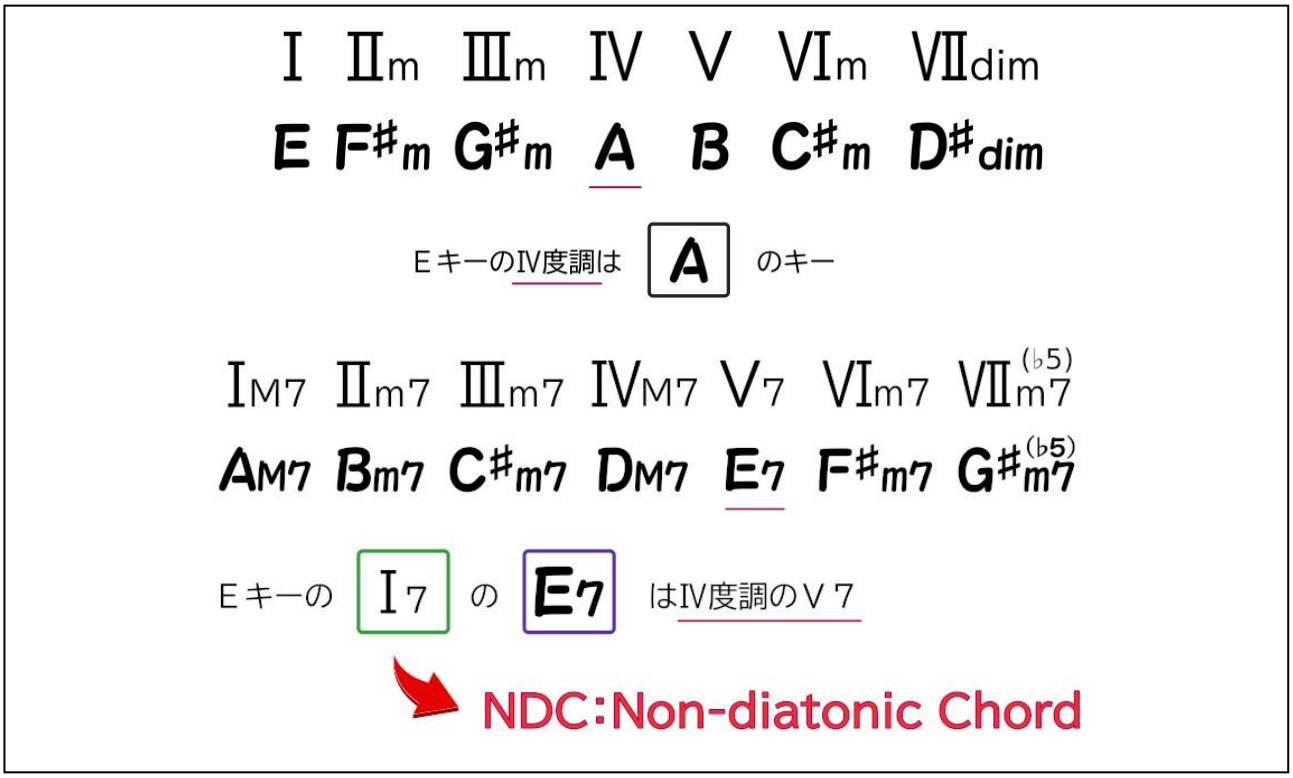
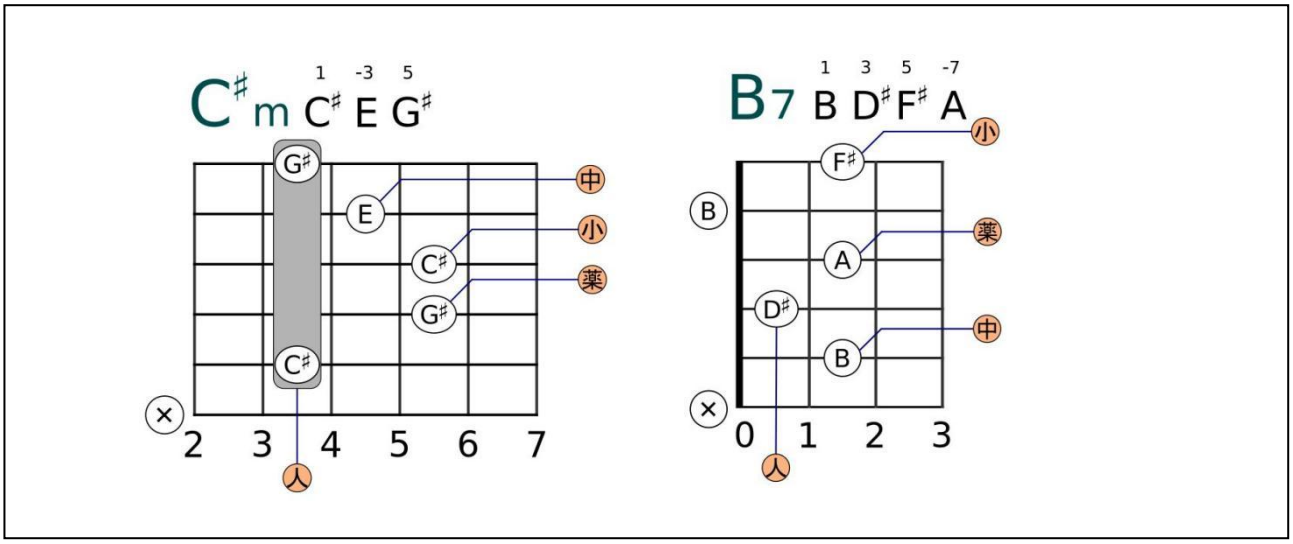


置き換えられて新しく登場したコードは、まず橋を架けるドミナントセブンスのＥ型Ｅ７。



これはＡのキーから借用してきたＮＤＣ— ノンダイアトニック・コード —です。主たるキーのＥを

基準にした場合、Ａのキーは𝖨𝖵度調にあたるので、Ｅキーの Ｉ ７であるＥ７は「𝖨𝖵度調のＶ７」ということになります。



　それから切なさを演出するⅥｍのＡ型Ｃ♯ｍと終わった感を醸し出すＶ７のＣ型Ｂ７の計三つがリハーモナイズで置き換えられたコードです。